

戦後復興の中で創出された都市祝祭とその後の展開

- よさこい/YOSAKOI系イベント祭り -

内田忠賢 (奈良女子大学)

## 0 はじめに

本報告では、戦後復興の中で創出されたイベント祭りのうち、「よさこい」の変貌と展開をテーマに、現在までの約70年ほどのスパンで追いかけてみたい。1991年までは、高知よさこい祭り関係資料(『年史』、高知新聞など)をもとにする。1991年以降は、高知だけでなく、各地で始まった「よさこい/YOSAKOI系イベント祭り」(以下「よさこい」と略)関係資料の検討だけでなく、報告者の参与観察(踊り子、チームスタッフ、審査員など)をもとに、その展開を追いかける。報告の縦軸は時間軸、横軸はテーマ別とする。テーマは①社会性(人的ネットワーク)、②空間性(会場、開催地の展開)、③競技性と観光化の変遷を検討し、1990年代以降については④地域文化としての意義、⑤「よさこい」をめぐるイメージを分析する。

## 1 「よさこい」の創出と展開

1954年、戦後復興の中、商工イベントとしてのダンス・フェスティバル、高知「よさこい祭り」は創出された。集客を目的にしたイベント祭りである。地元の作曲家、武政英策と日本舞踊5流派の師匠たちが基本的な踊り(正調)を創作し、商工会議所や観光部会がイベント全体を設計した。第1回は、郷土芸能大会、大酒飲み大会ほか多種多様な出し物が並び、まさに市民祭だった。しかし、第2回目から、出し物を「鳴子踊り」だけに絞られ、踊り子は両手の鳴子を鳴らしながら、隣県の阿波踊りに対抗した。その後、ローカルな商工イベントとして紆余曲折を経ながらも「鳴子踊り」の競演が継続された。

転機は、1992年。札幌の大学生たちが、高知「よさこい祭り」を模倣した「YOSAKOIソーラン祭り」が始めた。これをきっかけに、1990年代半ばから全国各地で「よさこい」が始まる。大小含めれば推定約800ヶ所。2000年代以降は海外各地で「よさこい」が始まる。東・東南アジア、ハワイ、北米西海岸、南米ブラジル、パラグアイに展開する。本発表では、報告者が調査する日本国内(高知、関東)およびブラジルでの事例をフィールドとする。

## 2 「よさこい」が生む社会性

高知では、商店街の活性化、市民生活の復興のため始まったので、当初は町内会や商店街を中心とする地域コミュニティが担い手だった。徐々に増えてゆく企業チームは「よさこい」に福利厚生や広告塔の役割を与えていた。多様な踊りが登場する80年代に入ると、踊りだけに集まるクラブチームが増えてくる。90年代以降は、チーム名が商店街や企業であっても、その踊り子たちの多くはボランティアに集まる、クラブチームが多くなった。2000年代以降はインターネットでの踊り子募集も始まり、関西、関東からも応募者が少なくない(現在では「よさこい留学」「よさこい移住」という現象もある)。

また、札幌 YOSAKOI ソーラン祭りの成功や時代の変化により、高知・札幌その他の「よさこい」では、大学生のチームが増えただけでなく、参加団体の大多数がクラブチームになった。全国各地の「よさこい」チームは、相互に Web 上での交流、情報交換を行い、踊り子の出入りも少なくない。集団の結合契機としては、地縁から社縁、そして選択縁へ、さらに、より開放的なネット縁（インターネットでの結びつき）へと移行してきた。

海外では、東アジア、東南アジアで「日本大好き」な大学生を中心に、ハワイ、北米、南米では、日系人コミュニティが中心となり「よさこい」が拡大する。ブラジルを例にすれば、現在では、非・日系人の参入も少なからず見られる。

それぞれのチーム内を細かく観察すると、少なくとも 90 年代以降は、匿名性や流動性が強い集団である。現場の実感としても、intimate stranger（親密な他人）と呼ぶに相応しい人的ネットワークである。また、各チームのメンバーも、YouTube などネット動画をフル活用して練習するので、他地域、遠方からの参加が容易となっている。

### 3 「よさこい」をめぐる空間性

1992 年までは高知のローカル・イベントであったため、空間性としてはまず、競演場（+ 演舞場）ほかの空間的配置の変遷に注目した。商店街活性化を目標に始まったこともあり、主な競演場は商店街である。しかし、商店街の盛衰、地元経済界の動向により、競演場の配置は微妙に変わる。地域コミュニティが、人的、財政的に競演場を維持できるかが鍵となる。

次に、1992 年からの「よさこい」全国展開では、開催地の拡大とその要因を考えた。開催地には、「よさこい」を地元で始めたいというイノベーターが必ずいる。札幌の場合は、北大生だった長谷川岳であり、千葉の場合は青年会議所の金崎勉である。イノベーターたちは、すでに開催されている「よさこい」を見て感動し、それぞれの地元で、地域を元気にしようと「よさこい」を始めた。滋賀県彦根市の「YOSAKOI ソーラン日本海 彦根三十五万石大会」は、（高知を模倣した）札幌の影響で始まった石川県の「よさこい」を、彦根の青年会議所メンバーが輸入した。古典的な文化伝播、隣接する地域からの伝播とは全く異なる。

当初は、対面での交流が「よさこい」増殖のきっかけだったが、それも 2000 年代以降は、インターネットが取って変わった。もちろん、チームを作り、踊りを創作し、さらにイベントを作る点では、対面での交流が欠かせないが、web 上での情報交換が現在の中心となっている。コロナ禍に見舞われた 2020 年、YOSAKOI させぼ（佐世保市）以外での、大規模な「よさこい」（対面）の開催はなかったが、web 上での大会、web 上での交流会が多く見られた。空間性という切り口が、ポスト・コロナの時代にどうなってゆくのか興味深い。

海外での展開は先にも触れた。東アジア、東南アジアでは、日本語・日本文化を学ぶ大学生が、また日本フェアなどをきっかけに、「よさこい」は各都市で始まった。ハワイでは、ホノルル・フェスティバルの一環として始まり、北米、南米では、日系文化を学ぶ若者たちが担っている。ブラジルでのイノベーターは、日系 1 世の飯島秀昭だが、主な担い手は、日本語を話せない日系 3 世、4 世となっている。日系の若者たちが、自分のルーツ、アイデン

ティティを模索すべく、鳴子踊りや和太鼓という文化活動に参入する。YOSAKOI-SORAN（ブラジル大会）は当初、大都会サンパウロで開催されていたが、第11回（2013年）から、人口の4分1が日系人を占める地方都市、パラナ州マリンガへと会場を移した。

#### 4 「よさこい」に見る競技性と観光化

高知「よさこい祭り」を中心に、競技化（スポーツ化）への変遷と観光化の関係を検討する。「見せる」踊りを競うことは、観光化につながる。高知「よさこい祭り」は、阿波踊りへのライバル意識の下、創出時から、観光イベントをも目論んでいた。

当初、戦後復興の市民祭であった「よさこい祭り」は人気の高まりとともに、採点競技へと進む。チームの表彰も、祭りへの貢献度から、集団でのダンスの評価へと移っていった。「よさこい祭り」の関係資料を検討すると、①市民祭の時代（1954～76年）、②アレンジ踊りの時代（1977～90年）、③採点競技へと向かう時代（1991～96年）、④コンテストと有名チームの時代（1998年～現在）と時期、変遷が辿れる。最初から競技化していた札幌YOSAKOIソーラン祭りへの対抗意識もよく分かる。札幌の全国への影響力に対し、本家「よさこい」を誇示すべく、1999年から本祭（「よさこい祭り」本番）とは別に「よさこい全国大会」が始まる。この頃、全国各地の大規模な「よさこい」は、全国大会、あるいは関東、東海など、地方大会の様相を呈した。開催地以外から遠征する多数のチームが参加し、演舞を競い合う。「よさこい」の競技化はメディア・イベントとしての宿命だろう。逆に言えば、観客動員を見込めるイベントとして観光資源化することは、当初の目的、地域活性化にかなう。

#### 5 「よさこい」は地域文化か？

上記のように、1990年代以降に始まった各地の「よさこい」は、インターネットの普及に伴い、ローカルなイベントとは呼びきれない。「〇〇よさこい」（〇〇には地名など）とイベント名が付いていても、参加チームの一定数は〇〇以外から遠征チームである。大規模な「よさこい」になれば、全国からチームが集まる。しかも、地元の有名チームでも、メンバーの多くが地域住民ではない。〇〇に無関係なオリジナル曲（アレンジされた民謡を含む）、オリジナルな振付で踊るチームたち…地域文化と呼ぶには無理がある。

その一方で、ローカルなアイデンティティを涵養する場面にも出会う。各チームとも、地域の民謡をヒントに創作された曲や振付だけでなく、たとえば「総踊り」（全参加チームが一緒に踊る、〇〇にちなんだ創作ダンス）の場面である。平成の大合併で4町2村が合併した南アルプス市（山梨県）では、地域のアイデンティティを作るべく、「南アルプスよさこい」というイベント祭りを始めた。総踊り「南アルプスよさこい 絆」も創作した。総踊りには、地元の風景や名産を振付や曲に織り込んでいる。地元への帰属意識を養うのだという。多くの「よさこい」は、地元の自治体、商工会議所が事務局を預かるので、地域をアピールするのに熱心である。そう考えると、「よさこい」は地域文化と呼べるかもしれない。

海外の「よさこい」の場合はどうだろう。少なくとも、ブラジルでは、「よさこい」を地

域文化と呼ぶには躊躇するが、日系の文化活動の一環であることには間違いない。また、日系人の文化活動が非常に盛んなマリノ市で開催される現在、「よさこい」は地域文化と呼ぶに相応しい段階に来たとも考えられる。

## 6 「よさこい」をめぐるイメージ

1990年代まで、「よさこい」は高知のローカル・イベントにすぎなかった。地域総出で盛り上げる最大のハレの場として、評判は悪くなかった。批判も聞かない。逆に言えば、有名な都市祝祭の仲間入りを果たしていないからでもある。しかし、札幌「YOSAKOIソーラン祭り」の大成功、続々と全国各地で始まった「よさこい」は、現代文化のひとつの社会現象流行として、一般には理解された。人気が高まれば当然、批判が集まる。

「よさこい」は、低能な若者たちが扇動するヤンキー文化であり、ナショナリズムの温床になるという批判である。論客としては、精神科医・香山リカ、マーケッター・三浦展、メディア社会学者・難波功士らである。いずれも、現場に立つことなく、現場を評論、批判する立場であるが、現場から言わせると多くの誤解に基づく批判ばかりである。たとえば、「よさこい」の実質的な主宰者は自治体や商工会議所であり、そこで活発に活動するエリートがコアメンバーである。各チームのリーダーたちも、商工会議所、青年会議所などで活躍する。「よさこい」の目的が地域活性化であることに、評論家たちは一切触れない。格差社会や下流社会が生んだイベントという結論ありきの批判で、大衆を煽っている。

## 7 おわりに

報告者が約30年、踊り子ほか内部者として注目してきた「よさこい」の約70年間の変遷を5つの視点から考えた。観察ではなく、「よさこい」に参加し、関係者となって初めて分かることも多い。「よさこい」は1990年代以降、国内の流行現象、2000年代以降は、海外で展開する日本文化の流行現象のひとつである。報告者は2008年、「よさこい」という流行について、その将来を危ぶむと書いた。50年後には、どうなっているだろうか。

また、首都圏各地で展開した阿波踊り、全国各地に展開する「ねぶた」や「エイサー」、北海道芦別市の「博多祇園山笠」など、都市祝祭の文化伝播は少なくない。また、思えば、近世起源の都市祝祭にも、歴史的に各地へ伝播したものが少なくない。その内実も詳細に検討すれば、大きく変貌していると思われる。時代、社会の鏡になるのではないか。

### 主な参考文献

- 阿南 透 (1997) 「伝統的な祭りの変貌と新たな祭りの創造」、小松和彦編『祭りとイベント (現代の世相 5)』、小学館
- 香山リカ (2002) 『ぶちナショナリズム - 若者たちのニッポン主義 - 』、中公新書ラクレ
- 川竹大輔 (2020) 『よさこいはなぜ全国に広がったのか - 日本最大の交流する祭り』、リーブル出版
- 難波功士 (2009) 『ヤンキー文化論 - 不良文化はなぜ強い - 』、光文社新書

- 松平 誠 (2008)『祭りのゆくえ - 都市祝祭新論』、中央公論新社
- 三浦展+スタンダード通信社 (2008)『日本溶解論』、プレジデント社
- 度会 環 (2009)「YOSAKOI ソーランが繋ぐ「ブラジル」と「日本」、浅香幸枝編『地球時代の多文化共生の諸相 - 人が繋ぐ国際関係』、行路社
- 内田 (1992)「都市と祭り - 高知「よさこい祭り」へのアプローチ -」、『高知大学教育学部研究報告』45号 (第2部)
- 内田 (1994)「地域イベントの社会と空間 - 高知「よさこい祭り」へのアプローチ (2) -」、『高知大学教育学部研究報告』47号 (第2部)
- 内田 (2000a)「変化しつづける都市祝祭 - 高知「よさこい祭り」 -」、日本生活学会編『祝祭の100年 (生活学 第24冊)』、ドメス出版
- 内田 (2000b)「都市の新しい祭り」と民俗学」、日本民俗学会『日本民俗学』164号
- 内田編 (2003)『よさこい YOSAKOI 学リーディングス』、開成出版
- 内田 (2004a)「第5章 民俗研究と地理学」、水内俊雄編『シリーズ人文地理学 第5巻 社会地理』、朝倉書店
- 内田 (2004b)「現代日本におけるダンス・フェスティバルの展開 - よさこい/YOSAKOI 系祭りを事例に -」、『舞踊学』27号
- 内田 (2008)「よさこい系イベントがもつ都市祝祭の宿命」、東京市政調査会『都市問題』99巻 1号
- 内田 (2010)「「よさこい」をめぐる若者論の現在」、谷口貢・鈴木明子編『民俗文化の探求 - 倉石忠彦先生古稀記念論文集 -』、岩田書院
- 内田 (2011)「高知よさこい祭り - 進化しつづける 祭りの原点 -」、早稲田大学 日本地域文化研究所編『土佐の歴史と文化 (日本地域文化ライブラリー6)』、行人社
- 内田 (2013)「よさこいが生み出すコミュニティ」、後藤・安田記念東京都市研究所『都市問題』104巻 9号
- 内田 (2015)「現代祝祭のグローバルな展開 - YOSAKOI-SORAN ブラジル大会 -」、『奈良女子大学地理学・地域環境学研究報告』8号
- 内田 (2020)「都市祝祭の現在 - よさこい系祭りの競技化 -」『奈良女子大学文学部教育研究年報 16号』